

日本のロータリーの生みの親である米山梅吉氏のことについて、色々の文献の文面をおかりして、纏めてみました。

(A) 生い立ち

米山梅吉氏は明治1年2月4日、江戸芝田村で、大和國高取藩の江戸詰、士族和田竹蔵の三男として生まれたが、4才の時父が死亡したため江戸を離れ、母が三島神社の神主の娘であったので、静岡県三島の叔父の家に寄寓することになった。ここで梅吉少年は小学校と中学校時代を、恵まれた環境と優れた教師の中で過ごすことができた。

梅吉少年は学業抜群、その上眼のクリッとした美少年であったため、代々名主を務めていた土地の旧家、米山藤三郎の養子に懇望された。12才のときである。米山家には一人娘の「はる」が6才であった。

梅吉少年は中学時代に、英語、数学、漢学を勉強し、殊に漢学は四書の輪読の個人的教育を受け、漢詩を作ることができた。当時、東京で発行されていた「穎才新誌」という雑誌によく投稿していたが、それに一番多く掲載されたのが梅吉と夏目金之助（漱石）であった。

そうしているうちに梅吉は将来のことを考えるようになった。このままでゆくと旧家を継いで地主として一生を過ごさねばならないかもしれない。こうした将来に対する煩悶から、ついに家出を決行してしまった。この時彼は16才であった。箱根峠を越えて横浜に出て、そこから初めて汽車にのって上京した。

(B) 苦学時代

東京では2-3の塾を変えたが、いつも塾僕をしながら勉強した。最後に入ったのが青山学院の前身である東京英語学校であった。この間、親友の藤田四郎に巡り会う。また本田庸一氏（青山学院2代目学長）からキリスト教的教育を受けたことは、彼の将来に大きな影響を与えた。

この頃東京府に勤め、三島から母を呼び寄せて一緒に暮らしている。一方米山家の怒りにあい、東京での3年間およびその後渡航したアメリカでの8年間、米山家からの財政的援助は絶たれている。しかし彼がアメリカへ行く志を納得して、急遽米山家への入籍手続きをとり、明治20年10月、晴れて米山梅吉となって渡米することができた。

(C) 渡米時代

当時の日本の青年は、キリスト教メソジスト派の福音会と言う伝導機関を頼ってアメリカに渡った。そこには40-50人の日本の青年が集まっていた。その頃、学費を持ってアメリカへ行く青年はほとんどなかった。今のアメリカと違い、学問といえばイギリス、ドイツへ行くのが普通であったが、アメリカには貧しい青年のための道が開かれていた。スクールボーイと呼ばれて住む部

屋が与えられ、仕事の暇に学校へ行くことが許されていた。梅吉もここに身を寄せた。たまたま本田庸一先生も渡米してこられて、ここでもまたいろいろと教えを受けることができた。(巧遅は拙速にしかず)

そしてカリフォルニア州のベルモント・アカデミーに入り、スクール・ボーイをしながら大学に入る準備をした。幸いに福音会関係からの推薦で、オハイオ州のウェスアレン大学に入学することができた。その後、ニューヨークのシラキュース大学に転じたが、学資を稼ぎながらの勉強であったので、大学を卒業するまでに数年を要した。こうして20代の8年間米国で過ごしたことはかえって米国の社会を知る上に役立ち、梅吉は新しい西洋文化や教養を十分身につけることができた。アメリカの情報を日本の新聞社に送っていた。

(D) 帰朝後の就職と勝海舟との奇縁

梅吉が帰朝したのは明治28年で、日清戦争が終わった年で、日本の実力が世界に認められ、国民の士気もいよいよ高揚している時期であった。法律と文学を専攻した彼は、まず新聞記者として活躍しようとした。当時の日本の第一級の新聞は、福沢諭吉の時事新報であったが、新聞の購読先は、都会は別としても地方では役場と学校と地主ぐらいで、一般の家庭ではほとんど読む者はなく、従って新聞記者の待遇はお話にならないものであった。そこで彼は新聞記者を断念し、とりあえず在米中に翻訳してあった「提督ペルリ」の原稿を整理して出版することにした。その題字を勝海舟に書いてもらうことができた。

「初雷発東隅 丙午仲夏 題提督彼里 海舟」

この本は大変評判がよかったが、文筆で生活を立てることの難しさを知った。当時勝邸には青雲の志に燃えた青年が大勢集まっていたが、梅吉はその中でももっとも意気投合し、大変かわいがられた一人であった。

海舟73才、梅吉29才

この年梅吉は養家の娘はると結婚し長女が生まれた。旧友藤田四郎に相談し、井上馨侯爵の紹介で三井銀行に入社した。(藤田四郎は井上侯爵の娘婿) 学識・人格ともに備わっていた梅吉はトントン拍子に昇進して間もなく神戸支店次席になった。この時、欧米銀行業務視察の出張命令が出る。たまたまその時政変があり、某大臣から貴下を秘書官に採用するから直ちに上京せよという電報が入った。勝海舟が発信したらしい。梅吉は少なからず迷った。若い時から官界へのあこがれを持っていたし、勝海舟の推薦とあらば尚更心が動かざるを得なかった。しかし、せつかくの井上侯の紹介で三井銀行に入れてもらい、いま欧米視察の大命を受けているし、親友藤田四郎にも顔向けができないと思い、大臣秘書の話は丁寧に断る事にした。欧米視察は1年2ヶ月におよび、銀行業務の勉強をし、その帰朝報告書はひとり三井銀行のみならず、広く当時の日本銀行界に与えた貢献は、計り知れないものがあつた。

(E) ロータリーを日本へ導入

大正6年梅吉50歳の時、政府の米国財政経済視察団の委員として渡米した。この時、三井物産のテキサス州ダラス支店長の福島喜三次を訪問している。福島はダラス・ロータリークラブの会員であり、(日本人で最初のロータリアン)国際ロータリーの話を知ることができ、非常に興味を感じた。同時にR I本部にも日本にロータリーを作りたいという空気が強かったため、梅吉は日本でのロータリーという構想を土産に帰国し、その結成に向かって非常な努力を払った。間もなく福島も帰国する。

大正9年10月20日米山梅吉を会長とし、福島喜三次を幹事とする24名の東京ロータリークラブが創立された。

米山梅吉のロータリーにおける活躍

- 1) 大正9年日本へロータリーを導入
- 2) 大正11年ポール・ハリスの「This Rotarian Age」を翻訳「ロータリーの理想と友愛」を出版
- 3) 大正13年初代スペシャル・コミッショナー
- 4) 大正15年国際ロータリー理事
- 5) R 170地区(日本)ガバナーを3期
- 6) 昭和3年「ロータリーの創設者ポール・ハリス」を出版
- 7) 昭和10年2月ポール・ハリス訪日

(F) 米山梅吉の社会奉仕事業

大正3年に梅吉は「新隠居論」という本を発表している。47才の働き盛りの時である。隠居といっても今すぐするのではなく、暗に自分の将来の方針を述べて、広く一般の人達に、殊に実業界の年寄り達にも一考を求めたのである。現役を離れ、今まで忙しくてできなかったことをする。何か社会のために奉仕することがなくては、まだ人間としての義務を十分に果たしたとはいえない。日本の公益事業がとにかくうまくいっていない、だから実業界の元老方、その名誉と信用と貴重な経験を生かして、大いに公益事業の世話を焼いてもらいたいという説である。

梅吉は55才(大正11年)から社会奉仕の仕事始める。まず日本赤十字社に奉仕活動し、第15回赤十字国際会議の日本代表になった。

67才(昭和9年)三井合名を退職するに当たり、会社より3000万円という大金を出させ、三井報恩会を創設した。当時遅れていた日本の医療施設の増進に努力した。

1) らい療養所 青森から沖縄に至るまで各施設を視察し、その都度患者への慰問品はすべて自弁した。視察の結果新たにらい療養所3000床を政府を援助して作らせ、それによって浮浪らい患者の大部分を収容することができ

た。この事業はらい病対策上きわめて画期的なことであった。

- 2) 癌治療のため100万円でラジウム5gを癌研究所に寄贈した。
- 3) 結核予防のため療養所を建設し、研究費を援助した。
- 4) 精神病院の新設、性病、トラコーマ、寄生虫、麻薬患者、盲人対策
- 5) その他社会事業、農村振興事業、学術研究の助成等を幅広く行った。

三井報恩会の事業は極めて多岐に渡り、昭和9年3月現在で3922項目にわたり、1753万円になっている。

(G) 奨学金

このほか梅吉は何人かの苦学生に学費を出しておられる。特にアジアの留学生を自費で援助しておられた。大正10年米英訪問日本実業団に参加して渡米したとき、ロックフェラー研究所に野口英世を訪ねているが、このときロックフェラー奨学金によって多くの日本学生が勉強し、それが日本の文化に大きな影響を与えていることを知り、そのころから彼の胸中には、日本人がアジアの留学生に奨学金を出してみたいという考えがあったのではないだろうか。

東京RCがその志を継いで米山ファンドを興し(昭和28年260万円)、その後、日本全国のRCの発起で「ロータリー米山記念奨学会」(昭和32年)ができ、たくさんのアジアの留学生を迎えることができた。

米山家の奥さんや子供達は、「お父さんはなぜあんなに他人に対して勤めるのでしょうかネ」と話し合うことがあった。それに対して梅吉は「他人が楽しむのを見ているほど幸福なことはない」といっておられたそうで、これが彼の処世訓であり哲学であった。

(H) 米山梅吉の晩年

昭和12年(70才)の時、彼は私財を出して青山学院に緑岡小学校を設立し、校長になる。昭和13年貴族院議員に勅選される。

昭和15年頃になると、軍部や警察の干渉や弾圧がだんだんひどくなり、各ロータリークラブの例会には憲兵や警察の特高が列席したり、卓話の内容をあらかじめ警察に届けなければならなかった。昭和15年9月11日戦前最後の例会の鐘が鳴った。(3地区、47RC会員数2142名)

梅吉の三男米山桂三著「ロータリーと父米山梅吉」の中に「父は貴族院に勅選されていたのですが、無謀な戦争に対する消極的なレジスタンスのつもりであったのか、とにかく病気を理由に大政翼賛会に正式には加入しなかった。そのためか青山の家には私服の刑事や憲兵が出入りしていたことを覚えています父がポール・ハリスの「ロータリーの理想と友愛」を翻訳したとき、「よき国際人はまずよき愛国者でなければいけない」と言っている箇所特に強い共感を覚えたほどの筋金入りの愛国者であったので、無謀な戦争に反対したわけです。病床で敗戦の報を耳にしたときの和歌に“くにたみの誰かは泣かんものあらむ

昭和二十とせ八月十五の日”という一首があります。

こうして父は、昭和20年の終戦国会には、何か期することがあったのか、病軀を押して登院したのですが、院内で倒れ、そのまま郷里に運ばれて病床の人となり、翌年昭和21年4月28日死亡しました」と記せられている。

享年79才。 同年9月17日福島喜三次氏死亡。

翌昭和22年（1947）1月27日ポール・ハリス死亡。

静岡の米山梅吉記念館の句碑に「いさかいも なく漫々の 青田可那」の一首が刻まれています。

見渡す限り青々と植えられた田圃を平和の象徴として詠まれたのではないだろうか。

*ロータリーにかかわる「参考文献」は週報に掲載

米山梅吉氏略歴

- (慶応4年) M1 (1868) 大和国高取藩士和田竹蔵の三男として出生
(ポール・ハリス誕生)
- M5 父死亡 静岡県三島に移住する
- M7 米山はる出生
- M8 映雪舎入学 抜群の成績で囑目される
- M12 米山家との養子縁組の話はじまる
- M14 沼津中学入学 米山家より通学
- M16 沼津中学中退 家出して上京する
- M17 光華塾入門 藤田四郎を知る
- M18 東京府吏員となり母と同居
- M19 東京英和学校入学 (青山学院の前身)
- M20 米山家に正式に入籍して渡米する
- M26 シカゴ世界博覧会で日本品の説明役をする
- M28 帰朝
- M29 勝海舟に師事「提督ペリー」を出版
米山はると結婚
- M30 三井銀行に入社 月俸40円
- M31-32 銀行業務取り調べのため欧米出張 仕度金250円
- M38 (1905) (ポール・ハリス ロータリー発足)
- T2 (46才) 第3回外遊 為替業務新設
- T3 新隠居論を書く
- T6 政府特派財政経済委員として渡米する
ダラスで福島喜三次氏よりロータリーの話聞く
- T9 東京ロータリークラブ創立 会長 米山梅吉
幹事 福島喜三次 会員24名
- T10 長男 東一郎20才で死亡
米英訪問日本実業団に参加
ルーズベルト大統領 野口英世訪問
- T11 ポール・ハリスの「**This Rotarian Age**」を翻訳
「ロータリーの理想と友愛」を出版
- T13 三井信託銀行設立
- T15 二男駿二21才で死亡
- S3 (61才) 「ロータリーの創設者ポール・ハリス」を出版
- S6 郷里の長泉小学校へ米山文庫寄贈

- S 7 (5・15事件 犬飼首相暗殺)
- S 9 三井報恩会設立 (3000万円)
- S 10 ポール・ハリス訪日
- S 11 (2・26事件 高橋是清蔵相暗殺)
- S 12 (蘆溝橋事件)
青山学院に緑岡小学校設立
- S 13 貴族院議員に勅選される
肺炎で聖路加病院入院
- S 15. 9. 11 (戦前日本ロータリーの終焉) 3地区 38クラブ
会員数 2142名
- S 15 - S 17 日本全国のらい療養所を視察
肺炎で入退院をくりかえす
- S 20 終戦国会に登院 院内で倒れ、郷里に帰り病床の人となる
- S 21. 4. 28 死亡 (78才)
- S 21. 9. 17 福島喜三次 死亡 (65才)
- S 22. 1. 27 ポール・ハリス死亡 (79才)